
神遊戯

劉 薫月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神遊戯

【Nコード】

N1594P

【作者名】

劉 薫月

【あらすじ】

神である、朔夜は気まぐれに人間界に来て、性別が女になってしまふ。

其処で人間の青年山茶花璃緒に出会い、楽しく暮らしていたが、何時までも神が人間界に居られるわけでもなく……。

何時かは人間界を離れ、天界に戻らなくてはいけない。

朔夜は残された時間で璃緒に恩返しをしようとする。朔夜は恩返しを期間内に出来るのか　！？そして、朔夜の身体にある変化が　。

遊戯1

天界、神の住む神殿にて。神の第一声。

「つまらん。そうだ、人間界に行こう！」

そんな一言から神の横暴は始まる。きっと以前から、始まっていただろうが……。

「と、言う訳で私は人間界に行く。時たま顔を出すから、それまで元気でやってろ」

『横暴にも程がありますよ、神様—————!!』

「よつと」

『ああ！行くの速いですよ!!』

「達者でな—————」

『神様あ—————!!』

「ふむ、此処が人間界か。さて、人間界に来て、第一の問題が此の姿だ……。」

何故私は人間界に来て、人間になっているのはいいのだが、性別が女になっているのだ。是はあいつらの最後の意趣返しか！酷いにも程がある！まあ、きっと私が言えたことでは無いんだろうが。

「流石に、是はどうしようか……。」
服は少し変えられて女仕様になっている。なんか地味なところに気を使っている気がするぞ、あいつらは。

「ふりふり……。千年以上生きた男に幾ら性別を変えたからと言ってこんなものを着せるか……。」

「あの……。どうされたんですか……？」

「え．．．？」

私は声が聞こえた後ろを振り返った。其処には上背のある男で顔は綺麗な方だろうと思われる。そして、其の男は私を見て、顔を赤くした。．．．．．何故だ？

「え．．．と．．．．．、何か用か？」

「え、あ、と、多分それは此方の言葉かと．．．．．」

「ふむ、そうか？」

「ずいぶん古風な喋り方ですね．．．」

「癖だ。気にしないでくれ」

「多分、女性がそんな言葉遣いしていたら誰だつて気にすると思いません」

「そういうものか？と言うか、青年。よく初対面の者に其処まで言えるな」

「それは貴女も同じかと．．．．．」

「ふむ．．．」

何故テンポよく喋れるのだろう、此の青年とは。不思議なものよ．．．．．

「とりあえず、何かお困りですか？何かさつきからぶつぶつ言っていましたし、普通の人間だったら、絶対声をかけたくない人ナンバー1に入りますよ」

「なんか、嬉しくないな。それは．．．」

「誰だつて嬉しくないですよ」

「青年、少し休めるとこは無いだろうか？少し此方に来るのに、力を使い過ぎた様で、喋っていたら余計に疲れた」

「それを先に言いましょう。貴女は．．．．．」

「す．．．ま、ん．．．．．」

「ちよつ！？」

私は完全に力が入らなくなり、その場で倒れた。

遊戯1 (後書き)

なんか、シリアス書いてる人がコメディを書くと言っつのは結構無謀なことなんでしょうが、よろしくおねがいます。

遊戯2（前書き）

もう一つの話が消してしまった・・・。
まあ、スランプに陥っていたんですけどね・・・。

遊戯2

目覚めると、其処は、知らない家だった。

「起きた？大丈夫？気分は悪くない？」

「……ああ。大丈夫だ……」

「もう少し、女の子らしい喋り方をしようよ」

「コホン、では。ええ、大丈夫です。これでいいのかしら？」

「おkです」

青年はグツと親指を立てた。

「そう言えば、貴方のお名前を伺っていませんでしたわね。お名前は？」

「俺は山茶花璃緒ぢやんかかです。貴女は？」

「私は朔夜さくやと申します。よろしくお願いしますね」

私は礼儀正しく、正座して、頭を下げ、挨拶をした。どうだ、青年！全知全能の神に出来ないことは（きっと）無いのだよ！！

「名字は無いのですか？」

「名字……ですか……」

無いぞ。そんなもの、神に名字など無いぞ、青年。

「神田かんだです。神田朔夜。改めてよろしくお願いします」

私はまた深々と頭を下げた。すると青年も、

「此方こそ……」

と言つて、頭を下げた。

不思議な青年だなあ……。

不思議な少女だなあ……。

(二人は似たもの同士の様だった。)

「戴きます。……ほう……、美味しいですね……。
。そう言えば、ご家族の方は？」

「両親共に単身赴任中です。俺は此処に残ったんです。それに一人
っ子です」

「成程……。」

「だから、此処は……、此処は……、静かすぎるのか……。
……。なんかさびしいなあ。」

「ふう、ごちそうさまでした。美味しかったです」

「お褒めいただき光栄です。朔夜さんのご自宅は何処です？お送り
いたしますよ？」

「無いです」

私は璃緒の質問に即答した。璃緒は私の答えにお茶を噴いた。

「……大丈夫ですか？璃緒さん……。」

「無いつて、無いつて貴女……。」

「無いものは無いのです。ご了承下さい」

「は、はあ……。」

璃緒は納得がいけないというような顔をしている。まあ、無理も
ないだろうが。

「でしたら、此処に住んではいかがですか？」

今度は私が呑んでいたお茶を噴いた。

「……大丈夫ですか？朔夜さん……。」

「い、いえ、全然大丈夫じゃありません……。貴方は何を考えて
いるのですか……。見ず知らずの者をこうやって介抱した
のだから、可らしいのに、其の者に一緒に住むだなんて……。」

「可らしい・・・でしょうか・・・？」
「・・・っ!!」

そんな子犬の様な眼で見ないでくれ、此方が居た堪れなくなるではないか!!

「つと、貴方がいいのであれば、私は構いませんが・・・」

「っ!!本当ですか!？有難うございます!」

「そんな風に喜ぶなんて・・・。普通喜ぶのは、私の方かと・・・」

「そうでしょうか？俺は物凄く嬉しいから、喜んでいるのですよ・・・!」

「・・・きつと、此の青年、璃緒は『天然タラシ』だろう。

私は心の中で、ふと、そう思った。

遊戯2（後書き）

遅くなって済みません。

色々と学校などで忙しいので・・・。

殆んど、休日更新になると思いますが、
是からもよろしく願います。

遊戯3

「よし、料理はこんなもんだろ！璃緒を起こしに行こう」

私は璃緒の家に転がり込んではや数週間が経った。慣れるのに時間がかからなかったのが、吃驚だ。

「璃緒、起きて下さい、朝です・・・」

声をかけると璃緒は身動きし、うつすらと眼を開け、私を見た。

璃緒はそれはそれは、物凄く嬉しそうな顔をした。

「朔夜さん、お早うございます・・・」

「おはよう、璃緒。それと、もういい加減「さん」付けは止めて。なんか居た堪れない・・・」

「済みません・・・」

「あと、其の敬語も止めて・・・」

「それは厭です」

「璃緒・・・」

璃緒の強情さには流石としか云えない。ま、彼が厭と云うなら、敬語はいいとしよう。

「朔夜は料理が上手ですね。凄く美味しいです」

「何時も褒めてくれてありがとう。でも、くすぐりたい・・・」

私は余り褒められることに慣れていないので、執拗に褒められると、こそばゆいのだ。しかも、彼の場合、天然タラシということもあって、余計に質が悪い。

「そう云わないで、誇りだと思えばいいんですよ・・・」

「それが出来ないんだけど・・・」

それが出来たら苦労はいらないのだよ、璃緒・・・。

「それでは、学校行ってきますね。お掃除よろしくお願いします、
朔夜……」

「はい、まかされました。行ってらっしゃい、璃緒」

璃緒は極上の笑顔を私に向け、家を後にした。

「さ、まかされたのだから、掃除をしなくては……」
と、いつても……。

「するところが無いのだが……」。私にどうせいと云うのだ。
……、璃緒は

初めて来たときから、此处には……、生活感が、人が住んでい
る様な感じでは無かった。静かすぎて、怖い……。

「璃緒は、強いな……。私だったら、こんなところ、住みたいとは
……思わないぞ……」

だが、居候いこうさせてもらっている身！我儘わがままは云えん！それなりの恩
を返さなくては！

遊戯3 (後書き)

色々、翻弄する朔夜は面白いです。

朔夜を「男」としてみるのではなく、「女」だと思えば読みやすいと思う……。

「あれ、朔夜……。どうしたの……。？ ひーひー云って……。」

「す、少し……。自分の予想外の事が起きてしまって……。私
は少し油断していたようだ……。」

「朔夜、朔夜。口調、口調戻ってるよ」

「……。御免……。本当に油断していたの……。」

璃緒、お前は私の状態より、口調を拘くだわるんだな……。相変わ
らず、不思議な人だ……。」

「朔夜、お風呂上がったの？ じゃ、俺も入ろうかな……。」

「はい、上がりました。入ってる間に、皿を洗っておくね」

上がってきて、すぐにキッチンに引っ込んだ。璃緒は私にわざわざ「入ってくるね」と云って、お風呂に行った。

「律義……。だな……。」

「次は……。月詠か……。」

溜息を吐き、私は窓を開けた。其処には闇色の髪の青年が立っていた。瞳は黄色。まるで黒猫だ。

「久しいな、朔夜……。元気そうだな、姉上が遊んで行ったようだな。済まん」

「おう、いい迷惑だ。」

私は口調を戻した。もし、こいつにあの丁寧な口調で話そうものなら、どん引きだ。

「姉上がお前を心配して見に行ったと聞いたのだが……。やっぱり違ったのだな……。」

「おう、見当違いだな。」

「ホント、濟まんな……。朔夜は一応上司なのに……。」「一応とは何だ、一応とは……。！」

私は真夜中だというのに、叫んでしまった。其の声を聞いたのか、璃緒が隣から声をかけてきた。

「朔夜？ どうしたの？ 叫び声が聞こえたよ！？」

「ひぎつ！？ だ、大丈夫です！ 何もありません！」

「……。朔夜……。何も無ければ叫ぶやつなんて居ないぞ……。」

「月詠は黙つとけ……。！」

月詠の口を私は良い音たてながら抑えた。

「いひゃいしょ（痛いぞ）……。！」

反眼の月詠を無視し、私は璃緒に声をかけた。

「御免なさい、夜中に大声出して……。！ 安眠妨害して御免ね……。！」

「いいけど、何かあったら云ってね……。？ お休み、朔夜……。」

「はい、お休みなさい……。！」
璃緒が部屋に入ったのを確認してから、私は月詠から手を離れた。

「何と云う、気持ち悪い口調……。！」

「黙れ……。！ 仕方ないだろう、璃緒が口調を気にするんだ……。」

「変な男だな……。そうだ、大神からの伝言だ」

「父上……。」「大神とは私の父親、茅ちかやの事である。神である私より、地位は高い。大神だからな……。」

「何時までも人間界に居られると思うなよ。神は私より必要な存

「在。ずっと人間界に居ると、お前は塵ちりと化すぞ」、との事だ」
「・・・それぐらい、判っている」

私に、時間が無い事位、判っている

。

遊戯4（後書き）

シリアスにはいった。

次回から、朔夜の恩返しが始まります。

「朔夜の恩返し」

遊戯5

時間が無いこと位、百も承知だ……………。

「璃緒、お早う。御飯、出来てるよ……………」
まるで新婚の様なやりとりだなと思う。

「……………朔夜？どうしたの、元気なさそうだけど……………」
璃緒は私の顔を覗き込んできた。心配させまいと、首を横に振る。
昨夜の月詠の言葉が私の頭を占めていた。

『何時までも人間界に居られると思うな』

実際には父上の云った言葉が……………。私は自分の胸に手を当てる。

「朔夜！」

「ツ……………ど、どうしたの？大声出して……………」
「どうしたのは僕の台詞だよ！やっぱり様子可笑しいよ？どうしたの！？」

ヤバい、璃緒をとて心配させてしまったようだ。

「何も、無い……………。御免なさい、眠くてぼうつとしてたみたい……………」

首を横に振りながら云う。苦し紛れの誤魔化^{しまが}した。

これは、璃緒に云えない。

「月詠、居るのか？それと天照も……………」

『ああ、居る』

『居るぞ』

私の問いかけに、二人は答える。

「父上は・・・其の後何か云っていたか？」

『いや、何も云っていない』

「そうか・・・」

少し安堵する。天照は扇子で私の頭を叩きだした。

『怖いと、思うのであれば、帰ってくればいいだろうに・・・』

』

それは正論だ。だが、私はまだ帰れない。

「帰れない・・・璃緒に『恩返し』をしなくては・・・」

『・・・鶴？』

「お前等の頭がどうなっているのか見てみたい」

二人はこてんと同じ方向に首を傾げた。

「取り敢えず、父上に云ってほしい。もう少しだけ時間をくれ、と

・・・」

『承知した』

二人そう云うと、すうと消えた。

遊戯6

「璃緒、私に恩返しをさせて！」
「……………は？」

私は決心した。今までの分を、璃緒にかえそうって……………。

「な、何を唐突に……………」

「御免、その、早く……………そう！此の前、親から連絡あって、帰ってこいって……………」

「……………え……………？」

璃緒は私の言葉を聞くと、眼を見開いた。

「だから、実家に帰るまでに……………貴方に恩返しを……………」

「い、いらない！君が離れるなんて、厭だ！！」

璃緒は顔を悲しそうに歪め、私の肩を掴んだ。其の力は小柄な璃緒に似合わず、強かった。

「い、たいよ……………璃緒……………」

私がそう云うと、璃緒はハッと気づいたように手を離し、俯いた。
……………自己嫌悪でもしているのだろうか？

「御免なさい、取り乱して……………。君に、帰ってほしく無くて……………。御免」

「璃緒……………」

何で？私から云いだしたのに、何で罪悪感が……………、私も離れたくないと思うの？

「お、おおおおお落ち着け、自分！私は仮にも神であ……………」

「

「??神?」

「な、なななな何でも無い!何でも無い!気にしないで!と、取り敢えず、そう云われても、両親は承諾してくれないだろうし・・・」

「それでも、俺は君と離れたくないよ・・・!」

璃緒はほろりほろりと泣きだした。

「り、りりりりり璃緒!?お、お願いだから!泣かないでッ!!」
「どうしよう、初めて見た。璃緒の泣き顔・・・。って、こんなこと思っている暇は無い!

「朔夜、お願いだから、俺から離れないで・・・!」

「璃緒・・・」

どうして、こんな、つらくなるの?

どうして、私は・・・??

遊戯7

突然、あの子は現れた。

帰り道、角を曲がったら、淡い光に包まれていた女の子が居た。

淡い金髪の美少女で、何かぶつぶつと、独り言を云っていて、近付きたくなかったけど、困った顔したから、流石に放っておけなくて……。

だから、気付いたら声を掛けていたんだ。

声に気付き、此方を向いた。其の顔は年相応の顔のつくりで、綺麗で、可愛かった（口調があれだったけど）。

神田朔夜 かんだ さくや

声フェチって訳じゃないけど、可愛い声をしていて……一瞬にして、好きになった。

だから、朔夜に家が無いのを、いいことに、同居を迫った。

意外にも、承諾してくれた。それが、凄く、嬉しかったんだ。

だから

「帰らなきゃいけないの　ッ」

そう、云われた時、凄く悲しかったんだ。

朔夜、俺から・・・離れないで　！！

遊戯8

どうしよう。このままじゃ……………！

「朔夜！ なにをしている！！」

「！！？」

璃緒は驚いて、其方を向く。そこには、天照が居た。

「あ、天照……………」

天照は完全に具現化した。

「朔夜、いつまでそうしているつもりだ。本来の姿に戻らぬか」

バツと天照は手を振り翳す。すると、私の身体は光に包まれた。

「朔夜……………」

璃緒は私の方を向いた。その時には、もう私は本来の姿に戻っていた。目線も高くなり、璃緒よりも高い。

「あ……………。戻、つてる……………」

手を見つめ、髪を引っ張ってみる。すると、前の色と長さになっていた。

「璃緒、私は……………」

「朔夜？ どうして、男に……………」

「璃緒、と申すのか？ 残念だが、其奴……………もとい、我的上司である朔夜は神だ。全知全能の神だ。人間でも無ければ、女でも無い」

その言葉に、璃緒は衝撃を受けたように、私を見上げた。

「本、当に……………？ 人間じゃ、無い……………」

問われた。弱弱しい声音で。私は居たたまねず、目を反らし、頷いた。

「済まない、嘘をついて。私は本来は男で、人間界には、私の気まぐれで来たのだ……」

もう、時間が無い。

「さよならだ。璃緒。恩返しができなくて、御免」
それを最後に、私は消えた。

遊戯8（後書き）

久しぶりに更新出来ました。

またパスとアドを忘れてまして……………
どうにかIDとパスd
やってみたら、出来ました……………
よかった。

遊戯9

「神っ、いい加減人の話を訊いて下さい！」

その声に、ハツとした様に私は顔を上げる。

「……………私は……………」

「最近、心此処にあらず、っていう感じですが……………人間界で何かあつたんですか？」

「朔夜」

その声を思いだし、私は首を振る。

「いや……………何も、何も無い……………」

そうだ。元から無かったことにすればいい。そして、そこで重大な事を思い出した。

「記憶を……………消してくるの、忘れたではないか……………」

天照と父上に怒られる前に消去してこよう。だが、消去するには、本人の元へ行かなければならない。

また、行かなくてはいけないのか……………？

私に、璃緒の前に現れる権利など、無い。私は彼を騙していたのだから……………。

でも、もう一度、弁明出来るのであれば……………。

「……………」

「へ？」

ポツリと呟く。勢いよく立ち、もう一度その言葉云った。

「人間界に行こう、絶対に行くッッッ！！」

私は走って神殿から飛び降り、人間界へ降り立った。

「……………放っておいて、よろしいのですか？ 大神……………」

「よい。あやつのが好きにしておきなさい」

大神と呼ばれた男は、クツリと笑った。

「ただし、少しお仕置きをしておくか……………」

何故、私は……………。

「またこの格好をしているのだっ！！」

また、女子の格好で、フリフリレースつきだ。ウザりたい。

もはや、これは……………。

「朔夜……………！」

振り返れば、璃緒が此方に向かって走っていた。

少し違うけれど、あの時と同じ。

「璃、緒……………！」

少しだけ、傍に居たいと、思った。

遊戯10

き、緊張する…………。

「……………」
「……………」

時計の秒針の音だけが訊こえる。それだけ静かだということだ。

話をどう切り出せばよいなか、判らん…………。

璃緒は私をずっと見てるし（私はずっと俯いているが）。

「ねえ」
ビクウツ

あからさまに肩を震わせてしまった。あー、璃緒が少し困った顔をしている…………！

「朔夜…………朔夜は、男、なんだよ、ね…………？」
こくり。

「そ、つか……………」
「……………」

璃緒は表情を暗くする。

「で、神って…………？」

「え、あ、と…………うん……………」

「で、何でまたその格好？」

「父上か、天照達のいじめかと……………」

「どんな……………」

璃緒は苦笑する。よかった、笑ってもらえた。私も自然と微笑わらつてしまう。

「朔夜、君は……僕の事、どう思ってる？」

「……仮にも男である私に訊くか？ 普通」

「訊く」

「……つぐつぐ思うが璃緒は変だな」

「朔夜に云われたくないよ。女装癖め」

「なんなんだ！？ 私に喧嘩を売っているのかっ！！」

「うん、売ってる」

「……神に対する冒瀆だ……」

「」

私は唸り、部屋から出ようとする。すると、璃緒が口を開いた。

「戻ってくればいい」

眼を見開き、後ろを振り返ると、すぐ傍で、璃緒が立っていた。

「朔夜、戻ってきてよ……」

懇願するように、顔を歪め、私の肩を掴む。その腕は、震えている。私は璃緒を見上げる。

この姿になると璃緒を見上げなければならん。解せぬ……

そんな事を考えている暇など無いのに……

「朔夜……」

愛おしげに、私の髪を梳く手つきは何処までも優しかった。

「わ、私は……男なんだぞ？」

「今は女じゃない」

「だ、だが……」

これまたピンチ。どうすればよいのだ……!?

遊戯 11

「ああ、そうだな。今は女だ。そして、今いま後もな」

突如訊こえた声に、私と璃緒は驚く。

「あ、天照……！？」

「朔夜。慈悲深気、我が大神がお前を完全に女にした。だが、神という役職は抜けられん。此処に住んでも構わないが、時折天界に戻ることになるからな」

「……父上の、何処が慈悲深いんだ……」

「え？ 慈悲深いじゃん。俺に朔夜をくれるんだから」

「……男に戻りたい……」

「えー？ 何でー？」

璃緒は朗らかに笑って私を後ろから羽交い締めにする。天照は面白そうに眼を細めた。

「随分と、気に入られおるな。吃驚じゃ」

「私もだよ、天照……。これじゃあ工事をしたと同然じゃないか……」

「よく知ってるね、そんな言葉」

璃緒は意外そうな貌かおで私の貌を覗き込む。

「私は全知全能の神だ。大神、父上の補佐でも有るからな、人間界の事は全て知っている」

「へー。初めて朔夜が神らしく思えた」

「冒流だ、神への冒流だ」

私は璃緒を睨んだ。璃緒は楽しそうに微笑った。

「これで、ずっと一緒に居られるね

」

「……………」

その言葉に私は赤くなり、俯く。

一緒に、か　それも、よいな　。

f i n .

後書き。

これにて、「神遊戯」完結いたしました。

完結出来たのも一重に読者様のおかげです。

感謝感謝です。

……新作が無いので、当分何も投稿しないと、思うんですが……。

何か面白いのが考えられましたら、投稿してみたいと思います。

私って、結構文才ないですね……。

他の方の小説を読んできると、自分が糞クソに思えてきます。はい、本マ気で。

私が一番気に入っているのは、霜月さんという方なんですけど、滅茶苦茶文才があって、読んで面白いですよ。

取り敢えず、これにて失礼いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1594p/>

神遊戯

2011年5月9日17時04分発行